はにわ 埴輪のさと鴻巣

生出塚（おいはのあたい）

埴輪ってなあに

埴とは埴土（はにつち）つまり粘土をさす言葉で、埴輪とは粘土を輪状に積み上げて作った物を意味しています。実際に古墳時代の人々がどのように呼んでいたかは不明ですが、奈良時代に書かれた『日本書紀』には、この埴輪という文字が既に使われているので、少し後の時代には、このように呼ばれたこともあったようです。

埴輪の起源は、弥生時代後期（3世紀）の吉備地方（現在の岡山県）にあります。この地方では墓に供え物を入れた壺とそれを乗せる器台を置く風習があり、それが大和地方（奈良県）に伝わり、巨大な古墳の周囲に大量にめぐらされるようになりました。これが埴輪の始まりです。

埴輪は、日本各地に前方後円墳が作られた古墳時代の４～６世紀頃、古墳の周囲や埋葬部の上に立て並べられたもので、そこには古代人の死に対する考え方や宗教的意味が反映されています。

埴輪には筒状の円筒埴輪（えんとうはにわ）と各種の器物（きぶつ）を模した形象埴輪（けいしょうはにわ）があります。これらの埴輪は、水鳥（みずとり）が死者の霊を運び、家は霊のやどる依代（よりしろ）というように、数種類の埴輪がそれぞれの意義と役割をもって、埴輪の世界を表現しています。また、埴輪は古墳時代の風俗・習慣・社会制度などを探る手掛かりを私たちに提供してくれます。

生出塚30号発掘

人物埴輪の出土状態（生出塚15号墳）

埴輪の種類

埴輪には実にさまざまな種類があります。大きくは筒形の円筒埴輪と各種の器物をかたどった形象埴輪の２つに分類することができます。また、形象埴輪は、かたどった物の種類によって家形・器財・人物・動物埴輪に分けられ、表現した物によってさらに細かく分類されます。

埴輪は、種類によって出現する時期と古墳での樹立場所を異にし、それぞれが意味を持ちながら特定の場所に配置されています。このことから、時期によって埴輪をもちいた葬送儀礼（死者へのまつり）が少しずつ変化していることが分かっています。

- 円筒埴輪
  - 普通円筒埴輪
  - 朝顔形円筒埴輪
- 形象埴輪
  - 家形埴輪（入母屋・寄棟・切妻）
  - 器財埴輪（大刀・靫・矛・盾・鞆・甲冑・蓋・翳・帽子・椅子・舟）
  - 人物埴輪（巫女・貴人・武人・力士・農夫・琴弾き・馬飼・盾持ち）
  - 動物埴輪（鶏・白鳥・鵜・鷹・馬・犬・猪・鹿・魚）

円筒埴輪

円筒埴輪は、もともと壺を乗せた器台から発展したもので、筒状の普通円筒埴輪と、器台と壺とが合体した形で口縁部が大きく開く（朝顔の花に似る）朝顔形埴輪に分けられます。この埴輪は古墳の周りに垣根のようにめぐらすことにより、悪霊が死者の眠る聖域（神聖な場所）に侵入することを防ぐ目的をもっていると考えられています。

家形埴輪

家形埴輪は、屋根の構造から入母屋造・寄棟造・切妻造の３つの形態があります。このうち、入母屋造りの家は、屋根に鰹木を乗せるなど、他のものより大きく作られることからその中心的存在で、まさしく王者の家としてふさわしい風格をもっています。

鰹木を乗せる入母屋造の家（高さ105cm）

寄棟造の家（高さ70cm）

埴輪の出現当初から見られる家形埴輪は、埋葬施設のある墳頂部に置かれているので、霊のやどる依代であるとか豪族の屋敷を表したと考えられています。

器財埴輪

器財埴輪は、種類から大別すると武器や武具・威儀具（権威の象徴）・器物などに分けられます。武器には大刀・靫・矛・弓があり、武具には盾・鞆・甲冑があります。また、威儀具としては蓋・翳などが代表的なものです。この他器物として椅子・帽子・高坏・舟があります。

器財埴輪は、埴輪出現以来長い間形象埴輪の首座を占めているため、種類によって消長があり、蓋や盾は最初から最後まで存続しますが、甲冑（短甲形）などは短命に終わります。

靫（ゆぎ）（高さ82cm）

翳（さしば）（高さ78cm）

蓋（きぬがさ）（高さ120cm）

蓋の復元図

鞆（とも）（高さ52cm）

大刀と鞆をつけた人物埴輪

大刀（たち）（右・高さ40cm）

人物埴輪

埴輪の代表格である人物埴輪は、起源神話に見られる殉死の代用として立てられたとする説が否定されて以来、その出現の由来は今日でも大きな謎となっています。人物埴輪は、埴輪文化の発祥地である畿内では５世紀中頃に出現したと考えられていますが、それでも約300年間続く埴輪の時代からするとやっと後半期に仲間に加わったに過ぎません。

武人（高さ127cm）

貴人1（高さ132cm）

貴人2（高さ131cm）

貴人3（高さ135cm）

両手を前方に出す女子（高さ83cm）

鈴鏡を腰にさげる女子（高さ70cm）

人物埴輪を中心に展開する埴輪群像の場面については、①葬列を表したとする説、②死者の復活を願う殯を表したとする説、③新たな首長が亡き首長の権力を継承する首長権継承の場を表したとする説、④亡き首長の生前の顕彰すべき業績を表したとする説などの解釈があります。
しかし、すべての人物埴輪の情景を説明するには、どれも一長一短があり、定説とはなっていません。

頭巾をかぶる男子（高さ63cm）

鍬をかつぐ農夫（高さ55cm）

振り分け髪に美豆良の男子（高さ60cm）

ちぢれ髪の男子（高さ28cm）

冠帽をかぶる男子（高さ27cm）

つばつきの帽子をかぶる男子（高さ25cm）

島田髷の女子（高さ20cm）

笄状のかぶり物の男子（高さ22cm）

顔を赤くぬる女子（高さ19cm）

動物埴輪

動物埴輪の種類には馬・猪・犬・鹿・牛・猿・鳥・魚などがあります。このうち一般的なのは、馬・猪・犬・鹿・鳥で、特に馬は重要な動物であったらしく全国的に広く見られます。また、鳥には鶏・白鳥・鴨・鶴・鵜などが見られますが、造形から種類を特定することが難しいものもあります。一方、牛や猿などは特例と言えるほど少なく、魚は関東地方にほぼ限定されています。

動物埴輪は、鶏を除くと人物埴輪と同じく5世紀中頃に登場しており、出現の背景には人物埴輪と密接な関係があったことが知られています。

猪と鹿（左・高さ24cm　右・高さ22cm）

水かきを表現する白鳥（高さ72cm）

鞍をつけた馬（高さ82cm）

男子人物の乗る馬（高さ102cm）

埴輪の製作

野焼きと登り窯

埴輪は初め地面に簡単な竪穴を掘って、周囲に薪を積んで焼く縄文時代以来の野焼きで焼かれていましたが、5世紀中頃に朝鮮半島から須恵器焼成の技法が伝わると、その影響を受けて本格的な登り窯で焼かれるようになりました。この焼成方法は、従来の野焼きに比べてより高温で焼け、一定の温度に保つなどの火の管理がしやすく、しかも一度に大量に良質な埴輪を作ることができるようになりました。このことから、5世紀後半以降、登り窯による埴輪生産が各地に伝わり、埴輪生産に大きな転換をもたらしました。

登り窯での埴輪生産のようす（馬室窯）

埴輪製作場

埴輪を生産するのに必要なものは、粘土・水・燃料用薪です。このうち、原料粘土については、採掘される場所が限定されます。近くに窯場を設ける場合には、適当な台地であることも条件に加わります。このことから埴輪の製作場は、いろいろな条件がそろった場所であると言えます。

埴輪を生産した場所では、埴輪を焼くための窯、埴輪を製作するための工房、粘土を取った粘土採掘場、一定の期間生活するための住居（工人用集落）などの施設が見つかっています。この他にも本来は埴輪を集積する場所、原料粘土や薪の保管場所などもあったと思われますが、全国的にまだ発見されていません。

埴輪をつくった人々

埴輪を生産する専門の人々を埴輪製作工人または略して埴輪工人と呼びます。さらにこの工人の集まりを埴輪工人集団と言います。

4世紀頃に始まった埴輪生産は、最初は古墳の造営のたびに、日常用の土器を作っていた人々を臨時に組織して製作に当たらせていたと考えられています。それが埴輪のまつりが盛んになるにつれて多量の埴輪を必要としたことから、より専門化した工人集団が組織化されていったと言えます。

八手状に延びる埴輪窯跡（生出塚窯）

埴輪を作った工房の跡（生出塚窯）

特に関東地方では、6世紀に他地域を圧倒するほどの埴輪の隆盛をみており、このような工人集団の活躍があったことが分かります。その様子を探る上で本市の生出塚埴輪窯跡群や馬室埴輪窯跡群は、大変重要な遺跡と言えます。

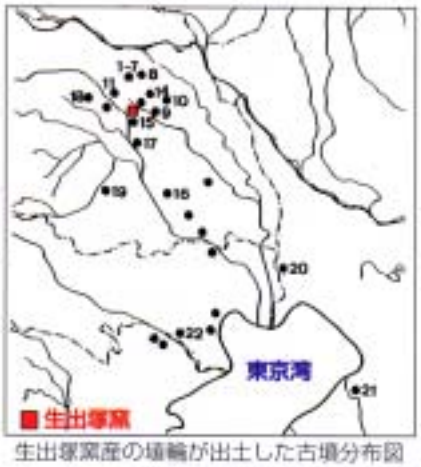
粘土を採掘した跡（生出塚窯）

失敗した埴輪を捨てた跡（生出塚窯）

鴻巣の埴輪製作跡

本市には原馬室（白雲荘の西側）に馬室埴輪窯跡、東・天神地区（旧市民会館周辺）に生出塚埴輪窯跡の2箇所の埴輪製作跡があります。馬室窯では、埴輪窯10基と工人用住居1軒、生出塚窯では埴輪窯40基、工房2基、粘土採掘場1箇所、工人用住居9軒が発見されています。

特に生出塚窯では、埴輪生産に関わる各施設が確認されており、東国最大級の埴輪生産跡として知られています。また、本窯では5世紀末から6世紀末の約100年間にわたって埴輪生産を行っていたことが長年の発掘調査で分かっています。これが、鴻巣は〝埴輪のさと〟と言われる由縁です。



生出塚窯産の埴輪が出土した古墳分布図

ここで生産された埴輪は造形的にも優れており、生出塚工人集団の窯業技術の高さを物語っています。また、生出塚窯の製品は、埼玉古墳群や鴻巣周辺の古墳群のほか、東は千葉県市原市から西は神奈川県川崎市までの東京湾沿岸地域の古墳にまで広く供給されていたことが明らかになっています。このように埴輪を遠くまで運ぶためには、元荒川の水運が重要な役割を果たしていたと思われます。

きっと、古墳時代の鴻巣には、有名ブランドの埴輪工場があることが、周辺地域に知れわたっていたのでしょう。

<開館記念>　鴻巣の文化財　第1号
―埴輪のさと鴻巣―
平成12年9月1日
編　集　鴻巣市教育委員会
発　行　鴻巣市教育委員会・鴻巣市遺跡調査会